

ヘルマン・シュミッツとゲルノート・ベーメの 雰囲気概念をめぐる

古川 裕朗

(受付 2004年10月12日)

序：ゲルノート・ベーメ「新しい美学」の課題と「雰囲気」の概念

ゲルノート・ベーメ¹⁾は、カントからアドルノに至るこれまでの美学を「伝統的な美学」と呼び、それに対して自身の美学を「新しい美学」と呼ぶ。ベーメによれば、新しい美学は二つの課題を担っている。一つは、美学の考察領域の拡張に関する課題である。伝統的な美学では、その考察領域が主として芸術や芸術作品に限られている。そのため、そこでは、「実在世界を感性論の視点から捉える (Ästhetisierung der Realität) としても、キッチュ、工芸、応用美術といった軽蔑的な視点からわずかに触れられるにすぎない [Atm. 7]」。したがって、「日常、政治、経済などの実在世界を少しずつ感性論の視点から捉えること [Ibid.]」が、新しい美学の課題となり、これは、ゆくゆくは「一般知覚論の構想へとつながる [Atm. 47-48]」系譜に属する。

もう一つは、美学の考察目標の方向性に関する課題である。伝統的な美学は、ベーメによれば、「本質的に判定美学ないしは判断美学にすぎず、結局は広い意味で芸術についての批判的吟味である美学は、確かに自然や自然的なものに対して繰り返し規範的な役割を付すことができたが、自然とは何かという問いに貢献するという義務を負おうとはしなかった [Atm. 7]」。したがって、ますます環境問題が深刻になっていく現代において、自然科学とは別の「自然に対するもう一つの関係について問うこと [Ibid.]」が第二の課題である。ここで言われるもうひとつの関係とは、感性的側面から自然に接近するやり方であり、こちらは、自然美学へとつながる系譜に入れられる。

これらの課題を担った新しい美学を支える基礎概念としてベーメが用いるのが、「雰囲気 (Atmosphäre)」である。彼は、新しい美学に雰囲気概念を導入する上で、雰囲気を学術的な概念として使用することの正当性の有無について検証している。

まずベーメが確認するのは、雰囲気という概念にまつわる否定的な見解である。それはつ

1) ゲルノート・ベーメの“*Atmosphäre*”からの引用については、以下のような略号を用いて表している。

[Atm.]: *Atmosphäre, Essays zur neuen Ästhetik*, Frankfurt am Main 1995.

まり、雰囲気という言葉を使用することの安易さに向けられた疑念である。「雰囲気という表現は感性的論議にとって決してなじみのものではない。むしろそれどころか、たびたびその表現は、ほとんど必然的に、展覧会の特別招待日での開会演説や芸術カタログや祝辞に見受けられる [Atm. 21]」、とベーメは述べる。例えば、「作品の力強い雰囲気、雰囲気的な作用、雰囲気的な表現方法 [Ibid.]」などがそうである。しかし、「私達は、雰囲気という言葉でもって、何か不明確なもの、言い表しがたいものが示され、それはただ自身の言葉に詰まった状態を隠すためだけのものだという印象を持つ [Ibid.]」。雰囲気という言葉を用いることは、言語化し難いものをやむをえず表現するための緊急避難的な処方に過ぎず、私達の言語運用能力の限界を露呈させているという見方を拭いきれない。このように、ベーメは雰囲気という表現の曖昧さを確認する。

ベーメが指摘するように、確かに雰囲気という言葉を取りわけ芸術にかかわる場において使用することは、消極的な印象を与える。しかし、その一方でベーメは、私達が日常生活の中で、自然、空間、人間などの様々な事柄を「豊富なボキャブラリーを駆使して、雰囲気を性格付けている [Atm. 22]」という事実に着目する。彼が例に挙げるのは、春の朝の雰囲気、雷雲におおわれた空の不穏な雰囲気、谷あいの愛らしい雰囲気、庭のくつろいだ雰囲気、あるいは空間のくつろいだ雰囲気や張りつめた雰囲気、あるいはまた尊敬の念を起こさせる人間の雰囲気などである [Atm. 21-2]。このように日常生活において用いられる雰囲気は、「ある意味で何か不明確なもの、茫洋としたものだが、決してそれが何であるのかがはっきりしないのではなく、そのものの性格 (Charakter) を表している [Atm. 22]」なのであって、それゆえベーメは日常における雰囲気という言葉の積極的な役割を指摘する。その結果、彼は、たしかに雰囲気は何か漠然としたものに対する表現として用いられるが、「この表現そのものの意味が漠然としたものにならざるを得ないということではない [Atm. 28]」と、雰囲気概念を学術的な場へと導入することの正当性を示唆するのである。

さて本論では、ベーメが繰り返し依拠するヘルマン・シュミッツ²⁾の雰囲気概念を検討しつつ、ベーメの理解するシュミッツの雰囲気概念と、シュミッツ本来の雰囲気概念とのズレを検証することで、ベーメの雰囲気概念を明らかにしていきたい。

2) ヘルマン・シュミッツの著作からの引用については、以下のような略号を用いて表している。
 [LRG.]: Hermann Schmitz, *Der Leib, der Raum und die Gefühle*, Ostfildern vor Stuttgart 1998.
 [LuG.]: Hermann Schmitz, *Leib und Gefühl in der Kunst*, in: *Leib und Gefühl: Beiträge zur Anthropologie*, hrsg. von Michael Großheim, Berlin 1995, S. 9-25.
 [Sys.]: Hermann Schmitz, *System der Philosophie* Bd. 3 Teil 4, *Das Göttliche und der Raum*, Bonn 1995.
 翻訳に際しては、ヘルマン・シュミッツ「芸術における身体と感情」森秀樹訳（小川侃・梶谷真司編『新現象学運動』世界書院、1999年、83-110頁）を参照した。またシュミッツ哲学全体の理解のために、梶谷真司『シュミッツ現象学の根本問題』（京都大学学術出版会、2002年）を参考にした。

第1章：ベーメの雰囲気とシュミッツの感情

ベーメはシュミッツの雰囲気概念を次のように特徴づける。「雰囲気は、常に空間的に“縁を持つことなく溢れ出て、その際、場所を持たない、つまり一ヶ所に限定されない”。雰囲気は、襲い来る感情の諸力であり、諸気分の空間的な担い手である [Atm. 29]。」例えば、私達が山道を歩いていると、先程まで明るかった周囲が突然暗くなったとしよう。見上げると、空は黒い雲に覆われ、今にも雨が降りだしそうである。辺りは“不穏な空気”に満ちており、そうした不穏さは山道を歩く私達に襲いかかって、私達を“不安な気分”にする。この場合、不穏な空気、すなわち不穏な雰囲気は、確かに空間的に私達の周りに満ちている。そうした不穏さは空間的ではあるが、どこからどこまでが不穏であるというように場所を区切って特定することができない。空を覆う黒雲が不穏というのでも、山道が不穏というのでもなく、私達を取り巻く周囲全体が不穏なものとして感じられるのである。そして、“不穏な空気”という表現は、辺りが何らかの情緒的なニュアンスに満たされている様子を言い表した表現であり、私達を空間的に取り巻く“不穏な空気”は、私達を“不安な気分”にすることができるので、「感情の諸力」と呼ばれるのである。

一方シュミッツは、どのような文脈で雰囲気と言及しているのだろうか。雰囲気概念がシュミッツにおいて導入されるのは、「感情」の空間性を説明する場合である。シュミッツによれば、「感情は、空間的に、しかし場所を限定されることなく溢れ出る雰囲気 [LRG. 22]」である。このように“感情は雰囲気である”，とシュミッツが述べる場合、いわゆる「内面投入論」に対する批判が背景にある。内面投入論とは、例えば、今にも雨が降りそうな空気の“不穏さ”という外面世界に現れる感情的な性格を、その場にいる私の“不安な気分”といった内面世界の投影であるとする考え方である。しかし、このような考えは、実際の体験にそぐわない。空気の“不穏さ”を感じ取りながらも、私達自身は穏やかな気分であることがあるし、むしろ空気の“不穏さ”の方が主導的に私達の気分を不安にすることがある。また、周囲の空気は一様ではない。例えば、上空の黒雲は“不安な空気”に満ちているが、はるか彼方では雲の切れ間が見えて、洩れてくる日の光が“明朗な空気”を放っていることがある。その場合、もし雰囲気が私達の気分の投影であるのだとすれば、私達は複数の様々な気分を一度に投影していることになってしまう。

シュミッツはこのような内面投入論が生じてくる理由を、「心理主義」と「還元主義」に言及しながら、内面世界と外面世界が分裂するプロセスに沿って説明している。まずシュミッツは、対象の何らかの性質が人間の意識へとやって来て、その人の意識の中にその対象の代理的な表象を獲得する [LRG. 10]、というような認識過程の説明の仕方を「心理主義

(Psychologismus)」と呼ぶ。そこでは内面世界と外面世界が分裂し、「人間の全体験を、何階建てもの石壁の家のごとき内面世界に宿泊させる [Ibid.]」ことになる。その結果、「意識の所有者は理性として家の主人 [Ibid.]」となり、私達に生じる情動的で没意志的な揺り動かしを、理性の支配する内面世界に従属させることによって、意のままに処理することが可能になる。

このように、心理主義においては、人間のあらゆる体験を内面世界に閉じこめ、それらを理性のもとで合理化できるという長所があるが、その反面、「固有の内面世界から信頼できる認識へといかにして出ていくのだろうか [Ibid.]」という疑問が生じる。つまり、本来の外面世界をどのように規定するかという疑問である。そこでシュミッツの言う「還元主義 (Reduktionismus)」が登場する。還元主義とは、「正真正銘の外面世界、すなわち内面世界をすべて差し引いた外面世界を、とりわけ容易に同定でき、操作でき、数量化できる特徴を持った少数の階層にまで削り込むこと [LRG. 11]」である。すなわち、大きさや形態など、私達にとって比較的取り扱いやすいもののみを対象本来の性質であるとし、それ以外の含蓄深い印象や雰囲気は不要物であるとして対象から削り取るのである。その結果、「還元主義によって削り落とされた不要物を、自己占拠のために用意された内面世界の内に沈積させる [Ibid.]」ことになる。すなわち、外面世界と内面世界との二者択一においては、対象本来のものではないとされた残りの諸性質すべてが、必然的に内面世界の中に押し込められてしまうのだ。それゆえ、「人間に対して身体的に感知可能に襲い掛かり忍び寄る雰囲気は、私的感情であると解釈し直されたり、あるいは天気のように、空気の物理的状態すなわち生の経験の水面下で構成される気体の状態と心的な関与とに引き裂かれたりしてしまう [Ibid.]」。その結果、今にも雨が降りそうな状況の中で私達に迫ってくる空気の“不穏さ”は、私達の私的な感情の投影であると理解され、ここに内面投入論が成立する。

さてここで、ベーメとシュミッツの雰囲気概念の比較に戻ってみよう。シュミッツによれば、「感情は、空間的に、しかし場所を限定されることなく溢れ出る雰囲気」であった。一方、前述したシュミッツの雰囲気概念に対するベーメの見解では、「雰囲気は、襲い来る感情の諸力であり、諸気分の空間的な担い手である」という表現がされていた。両者の相違は、「雰囲気」と「感情」と「空間」という言葉の関係性にある。すなわち、ベーメが「雰囲気」を主語とし、雰囲気が持つ「感情」的な性質と「空間」的性質を強調しようとしているのに対して、シュミッツは「感情」を主語とし、その「空間」的性質を説明するために「雰囲気」を補助概念として導入しているのである。シュミッツの最終的なテーマは感情にあるのであって、「雰囲気」にあるのではない。言い換えれば、伝統的に内面投入論によって内面世界へと従属させられがちであった感情の概念が、決して私的なものではなく、空間的な広がりを持っており、それは私達が通常「雰囲気」という言葉でもって理解しているものに等しい、

こうしたことをシュミッツは主張したかったのである。一方ペーメは、雰囲気は「ある程度漠然としたかたちで空間を感情の色合いでもって満たしている [Atm. 22]」と述べたり、「シュミッツは雰囲気空間的性格を浮き彫りにする [Atm. 29]」と述べたりする。雰囲気についてのこのような見解はもちろん納得がゆくものであり、否定されるべくもないが、しかし、そうした雰囲気の特徴はむしろ私達にとって自明のことであろう。

第2章：ヘルマン・シュミッツの身体概念

私達は、シュミッツの言う雰囲気が感情であることを確認してきたが、次に押さえておかななくてはならないのが、感情と直接的な関わりをもつ「身体」の概念である。シュミッツによれば、「身体 (Leib)」とは、「五感（見ること、聞くこと、触ること、嗅ぐこと、味わうこと）や知覚にかかわる身体図式（すなわち、視ることや触ることの経験から導き出された自己の肉体についての習慣的な表象形象）などを手掛かりにすることなく、自分の肉体 (Körper) において、自分自身に関して感知され得るもの [LRG. 12]」である。そして、「身体」は、「狭まり (Engung) と広がり (Weitung) の中で力動性を備えた先次的な量感として、分割不可能に、平面とかかわることなく [LRG. 12-3]」広がっている。

例えば、身体の感知の典型的な例としてシュミッツが挙げるのは、呼吸である。私達は呼吸において、ある量感が狭まったり広がったりするを感じる。このような量感を、目で見たり手で触れたりすることによって捉えることはできない。そうした特定の感覚器官によって捉えられるものは、「肉体 (Körper)」と呼ばれ、「身体 (Leib)」とは区別される。

またこの量感は、肺などのある特定の臓器と結びついた臓器感覚とも異なる。その量感は、「胸あるいは腹部に感じられ、その胸腹部の中では同時に狭まりと広がりが具体化されるが、その際、始めに広がりが優勢であり、そしてその後、吸い込みが終わるころ、狭まりが優勢になる [LRG. 13]」、とシュミッツは述べる。呼吸の際に現れる量感は、たしかに肉体のある特定の場所と結びつく。しかし、量感が備える「広がり」と「狭まり」は、解剖学的な知識の助けを借りて表象される三次元空間内での肺の物理的な“膨らみ”や“縮まり”とは、必ずしも一致しない。シュミッツが記述しているように、息を吸い込んでいる途中では、肺の物理的な膨らみと身体の「広がり」は重なるが、吸い込みが終わり、肺が膨らみ切った状態では、ある種の強ばりを持った身体の「狭まり」へと移行するのである。

量感としての身体は、呼吸以外にも、痛みや痒みなどにおいて現れ、呼吸が胸腹部一帯で感知されたように、痛みや痒みなども肉体のある特定の個所において感知される。このようなある特定の場所と結びついて感知される諸々の身体を、シュミッツは比喩的に「身体の島 (Leibesinseln)」と呼び、身体が感知される個々の場所を「絶対的な場 (absolute Orte)」と

呼んでいる。では、場所が絶対的であるとはどういうことであろうか。例えば、突然どこかしらぐもすがゆくなったとしよう。その場合、私達は即座に手をその場所に正確にもっていくことができる。シュミッツはこのような例を挙げて、痒みのある場所は、「決して知覚に関する身体図式の中で、相対的な場の上で探し出されたり、また位置や距離を基準とした関係において出動の目標を定められる必要はない [LRG. 16]」と主張する。このように身体が感知される場所というのは、習慣の中で形成された身体図式や、視覚や触覚などの感覚器官によって獲得される位置や距離の関係性から独立し、「生き生きと閃く (frisch aufzuckend) [Ibid.]」というかたちで即座に与えられるという意味で絶対的なのである。

ではそれぞれが絶対的に与えられている個々の身体の島が統一的に捉えられる可能性はどこにあるのだろうか。先に示した痒みの例で言えば、痒みの現れている個所と、その痒みを的確に探り当てる手とを統合する同一の基盤とは何であろうか。このような統合基盤を説明するために、シュミッツは「個々の身体の島」と「身体の全体場 (Ganzort)」とを区別する。身体の島は、呼吸、咽の渴き、痒み、痛さなどによって、ある特定の場所と結びついて絶対的に見出される。そうした呼吸や咽の渴きなどの具体的に生じている身体の状態のことをシュミッツは「身体的揺動 (leibliche Regung)」と呼ぶのだが、このような身体的揺動は、身体の個別的な場所においてだけ生じるのではなく、身体全体においても現れる。身体全体に充滿する爽快さ、けだるさ、快さ、不快、眠気などがその例である。

例えば、空気の淀んだうっとうしい室内を逃れて戸外へ出たとしよう。そこで私が新鮮な空気を胸いっぱい吸い込めば、身体全体が爽やかさで満たされ、私は解放感に浸ることができる。ただし、私がどんなに解放感に浸ろうとも、私の身体が周りの空気に完全に溶け込み、周囲の環境と自己の身体とが完全に一体化してしまうことはない。むしろ、身体全体に生じる身体的揺動としての解放感、他の誰のものでもなく、私自身の解放感であり、そうした解放感を私はある種の切実さを持って受け入れるのである。したがって、解放感という「身体的揺動」ゆえに、「周囲の環境からの際立ち (Abgehobenheit) [Ibid.]」というしかたで、私は自分の身体に固有な領野を確認する。すなわち、このように絶対的なしかたで見出される領野が「身体の全体場」である。

第3章：ヘルマン・シュミッツ「感性的形象」の概念

これまでシュミッツの身体概念を確認してきたが、次の章において、シュミッツの雰囲気概念に対するパーメの批判を検討するために、ここからは「身体」と「感情」に基づいたシュミッツの形象理論を確認していかなくてはならない。私達は雰囲気としての感情を“感じる”のであるが、シュミッツは彼の論文「芸術における身体と感情」の中で、「感じる (fühlen)」

という言葉には二つの意味があると主張し、両者を厳密に区別する。

まず第一の意味は、雰囲気を単に知覚するという意味である。シュミッツはこれを次のように説明する。「物悲しい雨の情景を感性的に享受する場合がそうであり、また共感においてもたびたびそういうことがある。共感の場合であれば、誰かある人を襲っている感情の雰囲気は、その感情とは別の、共に喜んだり共に悲しんだりするといった感情の予感 (Vorgefühl) を通じて知覚される。[LuG. 15]」例えば、雨の情景は物悲しさという情緒的ニュアンスに満たされているのだが、そうした物悲しさという雰囲気としての感情を私が知覚しているとしても、私自身が必ずしも悲しい気持ちになるわけではない。また、誰かある人が悲しんでいるように見える場合、その人を取り巻いている悲しさの雰囲気を私が知覚するには、必ずしも私がいっしょに悲しんであげる必要はなく、かりに私が別の事情で嬉しい気持ちになっていたとしても、その嬉しさを保ったまま相手の悲しさを知覚することもできる。さらにまた別の言い方をするなら、各自の事情において怒っている人、喜んでいる人、あるいは悲しんでいる人など、様々な感情に襲われた複数の人々がその場に居合わせたとしても、雨の情景は同じように物悲しいものとして知覚される。すなわち、「感じること」の第一の意味は、空間的に辺りに広がっている客観的な雰囲気としての感情を知覚することである。

それに対して、「感じること」の第二の意味は、雰囲気によって情動的に襲われていること (affektives Betroffensein) である。シュミッツによれば、「感情は身体的揺動を通して襲いかかり、この身体的揺動が感情をその襲われている人に課す [Ibid.]」という。ここで重要なのは、襲いかかる感情と身体的揺動とが区別されているということである。シュミッツは、「苦悩は重くのしかかり (drücken)、恐怖は身体的な重苦しさによって咽を締め上げる (zusammenschnüren)」と述べるのだが、これは単なる比喩や慣用的な言い回しとして片付けてしまうわけにはいかないだろう。感情としての苦悩は、身体に重くのしかかって身体的な揺動を引き起こし、感情としての恐怖は、締めつけるような揺動を咽のあたりに引き起こすというように、身体の具体的な状態として解釈するべきである。したがって、前述した爽やかな空気と解放感との例を思い起こすなら、戸外の空気の内側に漂っている爽やかさという感情が、私の身体を捕らえ、解放感という身体的揺動を引き起こし、その身体の揺動を媒介にして、私は爽やかな気分を感じるのである。

雰囲気としての感情が身体に襲いかかる場合、感情は身体を捕らえ、身体を包み込み、そして身体は感情によって満たされる。このような感情と身体との結び付きを、シュミッツは「宿る (sich niederlassen)」という言葉で表現するのだが、彼によれば感情が宿るのは身体だけではない。「感情が事物の周りに集まって、そこに感情が浮かび上がり」、「いわばそうした感情のアウラないし後光」に包まれている事物のことを、シュミッツは「感性的形象 (ästhetisches Gebilde)」と呼ぶ [LuG. 21]。では、どのような仕組みにおいて、感情は身体

以外の事物にも宿るのであろうか。

例えば、車の運転をしていて、ゆるやかなカーブにさしかかった場合、眼差しを道なりにそわせていくと、自分の身体がすでに曲がる体勢をとっているのに気づくことがある。このように曲線や曲面を私達の眼差しがなぞっていく際に、自分の身体がその形態に同調することで生じる一種の身体的揺動のことを、シュミッツは「形態動向 (Gestaltverläufe)」と呼ぶ [LuG. 19]。また私達は、“柔らかな色”、“柔らかな音”、“柔らかな形態”というように、感覚の種類が異なっても同じ表現を使うことがある。こうした複数の感覚にまたがる相互の翻訳可能性のことを、シュミッツは「共感覚的性質 (synästhetische Charaktere)」と呼ぶ [LuG. 20]。このような形態動向や共感覚的性質は、シュミッツによれば、「身体との類似性 (Leibverwandtschaft)」を備えているという。ただしこれを単なる比喩と考えるべきではない。事物を眺めることを通じて、自己の身体としての眼差しが、身体に属していない事物と合同して力動的な構造を形成し、そこに「一時的な身体 (Ad-hoc-Leib) [Ibid.]」が形成されていると、シュミッツは考えるからである。したがって、形態動向や共感覚的性質の助けを借りることで事物の周りに仮設された身体に、雰囲気としての感情が宿るのである。

第4章：シュミッツ「感性的形象」の概念に対するベーメの批判

シュミッツは、身体と感情に関する概念を駆使することで、「感性的形象」の概念を規定した。しかし、ベーメはこの「感性的形象」の概念を批判する。ベーメが取り上げるのは、『哲学体系』におけるシュミッツの次のようなくだりである。「はっきり感知できる下層の事物（例えば、物、音、匂い、色）が、客観的な感情である雰囲気を、あたかも身体的に (quasi-leiblich) 自分の中に取り込み、そして雰囲気によって身体的に襲われていることを暗に示す場合、私はそうした事物を“感性的形象 (ästhetisches Gebilde)”と呼ぶ [Sys. 626]³⁾。」このようなシュミッツの「感性的形象」の概念をベーメは批判するのだが、本章では雰囲気の源泉、雰囲気存在論的身分、雰囲気の産出の3点に基づいて検討したい。

第1節：「物の脱自」としての雰囲気

まず第一に、シュミッツの雰囲気の源泉、すなわち雰囲気の出所に関する批判である。ベーメによれば、シュミッツは雰囲気に対して「あまりに大きすぎる自立性」を認めており、したがって、シュミッツの雰囲気は「神々のごとく自由に浮遊し、それ自体としてはさしあたって物と関わりを持たず、ましてや産出されることはない [Atm. 30-1]」という。では、なぜ

3) ベーメの引用では“so leibliche Ergriffenheit an ihnen”となっているが、シュミッツの『哲学体系』では、“so leibliche Ergriffenheit von ihnen”となっている。

雰囲気が物から自立してはならないと、ベーメは考えるのだろうか。

雰囲気と物との関係について述べるために、ベーメはまず「古典的な“物—存在論”」を批判することから始める。彼によれば、古典的な存在論では、物の性質が「規定語」であると考えられ、物の形、色、匂いなどは、ある物を他の物から区別するための基準であるという。それゆえ物は、外部に対しては限界付けられ、内部においては簡素化されるので、その結果、「物は通常、閉じたものとして思い浮かべられる [Atm. 32]」ことになる。またベーメは、カントを念頭におきながら、規定語を用いることで物について考えることはできるが、「そのように十分に規定された物が現実に存在するかどうかという問いを、なおも立てることができる」という事態を確認し、「こうした思考様式が、感性論の敵であり、邪魔者であるのは明らかである」と批判する [Ibid.]。

ではベーメはこのような古典的な存在論をどのように解決しようと考えているのだろうか。例えば、あるカップの色が青であるとしよう。古典的な存在論に従えば、私達は色によって青であると規定される物について、考えていることになる。この場合、この青という色は、物が“持っている”何かである。ただし、私達はこの青い色をしたカップがあるのかどうかなおも問うことが可能である。それゆえ、「主観が物を指定しているので、結局は、認識している主観に物は帰属させられる [Ibid.]」ことになる。

こうした思考方式に対抗して、ベーメが導入するのが、「物の脱自 (Ekstasen)」という概念である。その場合ベーメは、カップが青という色を「持っている (haben)」と考えるのではなく、カップが「青く在ること (Blausein)」を問題にし、それを「様態 (Weise)」として考える。すなわち、カップが「青く在る」ということは、「何か、なんらかのしかたでカップに限定されているということでも、何か、カップにはりついているということでもなく、逆に、何か、カップの周囲の環境に向かって発散されていること、周囲の環境を何らかのしかたで色付け、“染めている (tingieren)”ということ [Ibid.]」を意味している。そして、ベーメによれば、カップが「青く在ること」は、「カップが空間において現前しており、カップが自身の現前性を感知可能にしている [Ibid.]」ということであって、すなわち「カップが現前していることの様態」ということになる。このようにして、ベーメは、現前の様態を説明するために、「自己から現れ出ること (aus sich heraustreten)」という意味で、“物の脱自”という表現を導入する [Atm. 33]」のである。

以上のように、ベーメにとって物自身が何であるかということは、その物が持っている性質を他の物と比較し、その違いについて思考することで確かめられるのではなく、物自身が周囲の環境に対して発する現前性の様態を、私達が感性的に受け止めることで分かるのである。そして、物自身が発する現前性とは、ベーメの場合、雰囲気に他ならない。したがって、雰囲気を物の現前の様態、すなわち物の脱自であると考えたベーメにとっては、「雰囲気は

物から出てくるものとして考えられなければならない、シュミッツのように自由に浮遊するものと考えてはならない [Ibid.] のであって、事物が「雰囲気を取り込む」というシュミッツの考えは、ベームにとって否定すべきものなのである。

第2節：「現実性」としての雰囲気

次に、シュミッツに対するベームの批判の二つ目を確認したい。第二の批判は、シュミッツの雰囲気の存在論的な身分に対して向けられたものである。ベームは、「物が雰囲気によって刻印されたり色付けられしたりすることを、シュミッツの場合は、古典的な主観的“あたかも～かのようにの形式 (als-ob-Formel)”でもって解釈されなければならない」と述べる。このような批判は、はたしてどのようなことを意味しているのだろうか。

「二元論の克服のためには、主観的側面についての考え方を徹底的にどのように変えればよいのか、シュミッツによる身体の哲学を見れば分かる」とベームが述べているように、彼は、シュミッツが伝統的な内面投入論を克服しようとしたことを評価する。しかし、ベームはそれだけでは不十分であると考え、「同様のことが、今度は客観の側においてもなされなければならない [Atm. 32]」と主張する。たしかにシュミッツは、内面投入論を批判することによって、感情を“魂”という内面から解き放ち、空間的に広がる雰囲気として捉えることに成功した。しかし、シュミッツの雰囲気は、ベームの解釈では、空間の中を自由に漂うものである。そうした雰囲気の特定の場所を持たない性質のことを、ベームは「存在論的な没場所性 (ontologische Ortlosigkeit)」と呼ぶのだが、「雰囲気について語ることに正当性を与え、雰囲気の存在論的な没場所性を克服するためには、雰囲気を客観と主観との二元論から解き放たなければならない [Atm. 31]」と主張する。

ベームも指摘しているように、雰囲気という概念が曖昧さを与える理由には、「雰囲気が、とりわけ存在論的な位置付けに関して確定されず、雰囲気を、それが発せられる客体や周囲の環境に帰属させるべきか、それとも雰囲気を経験する主体に帰属させるべきか正確には分からない [Atm. 22]」ということがある。しかし、ベームにとって否定すべきことは、こうした二者択一の思考ということになるだろう。

そのために、ベームは雰囲気が客観でも主観でもないということを検討する。すなわち、雰囲気は、「物が持っている性質」でも、「魂の状態の規定」でもない [Atm. 33]。例えば、谷あいの風景が晴れやかであるということは、その谷あいが晴れやかさという性質を“持つて”いるのでも、内面的気分の晴れやかさを谷あいに投影しているのでもないということである。しかし、それと同時に、雰囲気がやはり客観的な側面と主観的な側面をもっているということも否定しがたい。「脱自と見なされる物自身の性質によって、物が自身の現前性の領域を分節化する限り、雰囲気はやはり物的な何かであり、物に属するもの [Ibid.]」である。

また「雰囲気が、身体的な現前性というかたちで人間によって感知され、感知することが同時に、空間において主観が身体的な状態にあるということに等しい限り、雰囲気はやはり主観的なものであって、主観に属する [Atm. 34]」のである。すなわち、一方で谷あいの風景の晴れやかさは、脱自として谷あいから発散されるものであり、また他方で、私達が晴れやかな谷あいを眺めることによって、晴れやかな気分浸っているということである。

こうした雰囲気の両義性を、ベーメは「現実性 (Wirklichkeit)」という概念を導入することによって乗り越えようとする。彼の言い方は次のようになる。すなわち、雰囲気は、「知覚する者と知覚される物の共通の現実性である [Ibid.]」、と。したがって、「谷あいが晴れやかであると言われるのは、谷あいが発散している雰囲気が晴れやかで、この雰囲気が人間を晴れやかな気分の中に置き入れることができるからである [Ibid.]」とベーメが述べる場合、それはつまり、谷あいが、晴れやかさという現実性を、「知覚している者と分かち合っている (mit einem Wahrnehmenden teilen)」ということを意味しているのである。

さてここで、シュミッツの「感性的形象」の概念に戻ろう。雰囲気としての感情が後光のように集まる感性的形象において、私達がその感情を知覚する場合、事物と身体との類比的な構造を基礎にしていた。すなわち、身体に感情が宿ると同じように、感性的形象にも感情が宿るのである。そして、感性的形象に宿る感情を私達が知覚するのは、感性的形象と身体との間に仮設的な身体が架橋され、そうした「一時的な身体」が感情を「あたかも身体的に (quasi-leiblich)」宿すことによって可能になるのであった。ベーメによれば、シュミッツの感性的形象の概念に基づくなら、「私達が谷あいを晴れやかだと特徴づけるのは、谷あいがあたかも晴れやかさによって身体的に襲われているかのように見えるから [Atm. 31]」ということになる。したがって、感性的形象に基づく雰囲気知覚は、「古典的な主観的“あたかも～かのようにの形式 (als-ob-Formel)” [Ibid.]」でもって解釈されなければならない。

このような批判をベーメがする理由は二つある。第一に、シュミッツの場合、感情としての雰囲気は、そもそも事物から発散されるものではないので、現実性としての雰囲気を分かち合っていることにはならない。それゆえ、ベーメの解釈では、シュミッツにおける雰囲気知覚は主観的ということになる。第二に、感性的形象における雰囲気知覚は、<感情—身体>と<感情—事物>という類比的構造と、それをつなぐ“仮設的な身体”に基づいている。それゆえ、感情は直接身体と関わるのではなく、仮設的な身体に間接的に関わるができるだけである。したがって、例えば、谷あいが晴やかであると言われるのは、「谷あいが、晴やかな人間に、なんらかのかたちで類似しているから [Atm. 34]」ということになり、そうした類似性に基づいた構造を、ベーメは「あたかも～かのようにの形式」であると捉え、批判するのである。

第3節：雰囲気の「産出」

シュミッツに対するベーメの批判の三点目は、雰囲気を産出することについてである。ベーメは、シュミッツの理論に関して、「受容美学としては強力であるが、産出美学という面では弱く、雰囲気についての彼の言葉は、雰囲気が物の質によって産出され得るという可能性とまっこうから対立する [Atm. 31]」と主張する。シュミッツの場合、雰囲気としての感情は事物に宿るものであって、ベーメのように脱自として物から雰囲気が出てくるとは考えない。それゆえ、シュミッツの理論において雰囲気が産出されることはあり得ない。したがって、ここでの問題は、なぜ雰囲気の産出をベーメが重視するかである。

ベーメによれば、主に芸術作品とかかわる伝統的な美学が扱ってきた雰囲気には、例えば、美、崇高、あるいはピクチャレスなどがある [Atm. 35]。しかし、デザイン、舞台美術、広告、化粧、インテリアなどによって生み出される雰囲気は多種多様であって、ベーメは、なんらかの感性的効果を与えることを目的として作業を行うことを「感性的活動 (ästhetische Arbeit)」と呼ぶ。こうした活動は恣意的に行われるのではない。「雰囲気についての極めて豊富な知識が、感性的活動を行う人の実践的な知識の中にある [Ibid.]」とベーメは考える。そして、「これらの知識は、客観の具体的な性質と、それらが発散する雰囲気との関係について説明し得るはずだ」と述べる。

では、なぜ雰囲気に対する知識をベーメは問題にするのであろうか。ここでベーメが「新しい美学」を構想するにあたって、二つの課題をかかっていたことを思い起こされたい。一つは、美学の領域を芸術に制限することなく、実在世界のあらゆる現象を、感性的な視点から捉えていくことであった。もう一つは、快不快の感情の正当性を規定しようとする判断美学が問題にし得なかった、“自然とは何か”という問いに対して、感性的視点からアプローチすることである。ここで特に重要なのは、第一の課題である。ベーメが目指す一般感性論の領域は、化粧やインテリアなどの比較的小規模な「感性的活動」に限られるのではない。例えば、ベーメは、テレビや映画を利用した国歌社会主義ないしはファシズムの宣伝活動などについて言及する。そうした「感性的活動」はそれが与える効果についての確かな知識をもとに、行われなければならない。このようなある意図に基づいて感性的活動を行い、何かを制御しようとすることをベーメは「演出」と呼ぶのだが、これが政治的に用いられれば、一般感性論は「政治的感性論」になり、経済的に用いられれば、「感性的経済学」になるのである [Atm. 45]。このように雰囲気が産出できると考えることは、「雰囲気的美学」の射程を広げるがゆえに、これをベーメは重視したのである。

結 び

これまで、シュミッツに対するベーメの批判として、雰囲気の源泉、存在論的身分、雰囲気の産出の3点について考察してきたが、それがすべて正当な批判であるわけではない。

例えば、雰囲気の源泉に関するベーメの批判である。この点については、梶谷真司『シュミッツ現象学の根本問題』が手掛かりになる。梶谷氏は雰囲気を産出するというベーメの主張に対して次のように批判している。「雰囲気の深淵性——場所的に限定されず、あたりに茫洋と広がるという性格——を否定し、物から脱け出たものとしてその周囲に位置づけるのは、現象を誤認しているように思われる。たしかに、物の属性をつうじて雰囲気は生み出されているとも言えるが、厳密に言えば、物の属性はその場の雰囲気を規定する一契機にすぎない⁴⁾。」

注意すべき点は二つある。第一に、梶谷氏の最終的な主張は、雰囲気を産出することはできないということである。なぜなら、「光や空間の大きさ、暖かさ静けさなど、雰囲気を規定する契機は他にもあり、実際にはこれらが一体となって雰囲気 성격が決まると考えられる⁵⁾」からである。したがって、空間的に辺り一帯に広がる雰囲気の源泉に関しては、「そもそも『どこから』という問いが意味をなさない⁶⁾」ということになる。しかし、第二に、梶谷氏が「たしかに、物の属性をつうじて雰囲気は生み出されているとも言える」というように、こうした理解がシュミッツの雰囲気概念から見て誤りだったとしても、私達は日常的な視点においては、事物によって雰囲気を作られるということを素朴に信じているのではないだろうか。したがって、雰囲気概念には少なくとも二種類あることが分かる。一つは、シュミッツのように意のままに操作し得ない雰囲気であり、もう一つはベーメのような意のままに操作可能な雰囲気である。したがって、これら二つの雰囲気概念をさらに統合するような原理を見出すことが、雰囲気美学のさらなる課題となるだろう。

4) 梶谷真司『シュミッツ現象学の根本問題』京都大学学術出版会、2002年、181頁。

5) 梶谷真司、前掲書、同頁。

6) 梶谷真司、前掲書、166頁。